

「鼻」の歪み

第一章 「鼻」の構造

芥川龍之介の短篇「鼻」は、長大な鼻を持つ主人公、禅智内供の不安に始まり、安心に終る物語である。先ず、初めに、内供の不安は、次のような形をとって現れている。

五十歳を越えた内供は、沙彌の昔から、内道場供奉の職に墮つた今日まで内心では始終この鼻を苦に病んで来た。(中略) 内供は日常の談話の中に、鼻と云ふ語が出て来るのを何よりも惧れてゐた。

こうした不安から逃れる為に、内供は種々の工夫を凝らす、結果は常に不調であり、より一層の自尊心の毀損を味う外はなかった。

処が、こうした不安は、弟子の僧によつて齷された治療法により、鼻の長さが短縮されるとともに解消される。短くなった鼻を眺め乍ら、内供は、次のように呟くのである。

かうなれば、もう誰も嘔ふものはないのにちがひない。

此処には、一先ず、安心と呼んでもよい心境が現れている。だが又、続いて、内供は、周囲の「傍觀者の利己主義」に傷付き、再び不安の中へと突き落とされてしまふ。「前にはあのやうにつけつけとは嘔はなんだ」と呟き乍ら。そして、秋の落葉が寺内の庭を敷きつめる頃、以前通りの長い鼻を回復した内供は、それとともに安心を回復し、次のように呟くのである。

かうなれば、もう誰も嘔ふものはないのにちがひない。

越 智 良 二

以上のように、「鼻」の物語は、その主人公の心理推移に即して見れば、「かうなれば……」という同一の二つの言葉(註)を軸として、不安から安心、更に不安、安心へと三転する展開を見せている。こうした把握の後に、論者は、二つの疑問に就いて、検討を加えてみたいと思う。

先ず、第一に、論者が注目したのは、これ等二つの「かうなれば……」という述懐の内実である。この二つの言葉は、内容的には正反対のものである。言う迄もなく、前者に於ける「かうなれば」は、鼻の短くなった事態を意味し、後者のそれは、逆に、鼻の長くなった事態を示している。こうした具体的内容の相違はあるが、それぞれに、その時々々の内供の安心を語るものとしては共通している。しかし、又、その安心の度合や質は、この表現上の類似が示すように、同一のものであるのだろうか。

若し、仮に、この二つの安心が同質のものであったとすれば、常に他者の思惑を基準にして揺れ動く内供は、この先、又、鼻の長さを苦に病み、短くなることを切望し、再度の荒療治の後に、「かうなれば……」と呟く場面が再現されることになるであろう。詰り、内供には、永遠に其の不安から逃れる術がなく、精神的向上を遂げる可能性もないことである。

しかし、内供の二度目の安心は、確かに、「鼻が短くなった時と同じやうな、はればれとした心もち」ではあるが、一度目のそれとは微妙に異なるものものやうにも思われる。作者も説明するように、内供には、鼻を短くした後の周囲の人々の笑いが、以前よりも「つけつけ」したものであると感じ得るだけの感受性があり、恐らく、長大な鼻という現状からの脱却に失敗することによって、現状を其の儘容認しようとする諦念に立ち至つたものと思われる。

作者は、この内供の諦念を描く為に、作品中唯一度の自然描写を挿入しているが、それは、次のようなものである。

翌朝、内供が何時ものやうに早く眼をさまして見ると、寺内の銀杏や椽が一晩の中に葉を落したので、庭は黄金を敷いたやうに明い。塔の屋根には霜が下りてゐるせいであろう。まだうすい朝日に、九輪がまばゆく光つてゐる。禪智内供は、部を上げた椽に立つて、深く息をすひこんだ。(傍点論者、以下同)

この描写は、短い乍らも極めて効果的である。物語の後半部が、内供の憂鬱を反映し、謂わば、灰色を基調に展開されて来た後では、この鮮やかな色彩感が、其の儘内供の晴れやかな気分へと転換して行く予兆のようにも思われる。又、此処で、内供は、改めて「禪智内供」と呼び直され、謂わば、新生内供として立ち現れてもいる。

こうした描写の後に、作者は、長い鼻をあげ方の風にぶらつかせ乍ら佇む、伸びやかな内供の姿を描いて、この物語を締めくくっている。芥川は、この「愛すべき内供」を、そのような満足とも諦念ともつかぬ心境の内に置き、恐らくは、自らの失恋体験によって胸中に垂れ籠めていた憂鬱な霧を吹き晴らすやうとしたのであろう。後年、彼は、「鼻」執筆の頃を回想して、

……半年ばかり前から悪くこだはつた恋愛問題の影響で、独りになると気が沈んだから、その反対になる可く現状を懸け離れた、なる可く愉快な小説が書きたかつた。そこでとりあへず先、今昔物語から材料を取つて、この二つの短篇(注「羅生門」、「鼻」)を書いた。(未定稿「あの頃の自分の事」)

と書いているが、「羅生門」の「黒洞々たる」夜に呑まれた下人を描いて得られなかった「愉快」を、夜明けの内供を描くことよつて得ようとしたのである。そうした彼の希望は十分に実現したわけではないが、夏目漱石が評したやうに、「鼻」は、全体的に「自然其儘の可笑味がおつとり出てゐる」^(芥川)作品ではある。

新現実派と命名され、鋭利な皮肉を武器に人間心理の逆説を抉つたとされる芥川の初期短篇群には、意外にあたたかな、ヒューマニスティックな味のものも多いのだが、この「鼻」も、又、「愛すべき内供」の心情に即して見る限り、そうした作品の一つであり、それなりの纏まりと救いを持つものであるやうと思わ

れる。

だが、又、此処で、後半部の内供の心理を、やや外側から、客観的に眺め直して見ると、第二の疑問が生じて来る。即ち、それは、内供の感じたとされる「傍観者の利己主義」に就いて、その提示のされ方が、余りに唐突ではないかという疑問であり、延いては、果して、内供は本当にそれを感じ、それに傷付いてゐるのであろうかという疑問である。

内供は、鼻が短くなつた後、醜気乍ら、周囲の人々の啗いの質的变化に気付くが、その変化の原因を明察する知恵には欠けていた。内供に代つて、この「傍観者の利己主義」を提示するのは、作者である。

内供には、遺憾ながらこの間に答を与へる明が欠けてゐた。

——人間の心には互に矛盾した二つの感情がある。勿論、他人の不幸に同情しない者はない。所がその人がその不幸をどうにかして切りぬける事が出来ると、今度はこつちで何となく物足りないやうな心もちがする。(中略) さうして何時の間にか、消極的ではあるが或悪意を、その人に対して抱くやうな事になる。——内供が、理由を知らないながらも、何となく不快に思つたのは、池の尾の僧俗の態度に、この傍観者の利己主義をそれとなく感じ取つたからに外ならない。

此処では、明らかに、作者は主人公の代弁者として語っている。そして、傍観者云々の論理が、作中世界を被うやうな形で提示されている。しかし、この論理によつて、周囲の人々の笑ひの変化が完全に説明され尽しているのだらうか。確かに、人間本来の性質の中に「傍観者の利己主義」的傾向のあることは否定出来ない。池の尾の僧俗の裡にも、それはあつたに違いない。しかし、又、思い切つて観点を交えれば、この「傍観者の利己主義」は、専ら内供自身の側から、詰りは、彼の内面を通じてのみ現れてきたものに過ぎず、謂わば、内供自身が創出したものとも考えられる。

以下、作者の纏めようとする方向からは逸脱するが、内供と其の周囲の人々との関係をめぐつて、又、内供と作者との関係をめぐつて、自由に、恣意的に、「鼻」の内部を診断してみたいと思つ。

第二章 「鼻」の屈曲

「鼻」の輪郭が、主人公、内供の三転する心理変化によって捕えられることは、前章で述べたが、内供の鼻が短くなり、不安が安心へと変った処で、次のような記述が認められる。

——鏡の中にある内供の顔は、顔の外にある内供の顔を見て、満足さうに眼をしばたいた。

これは、自意識家、内供の、常に他者の眼を気にかける非主体性を象徴するような一文であるが、「鼻」はこの辺りをも一つの境として、前、後二つの部分に分けられる。そして、又、其処から、「鼻」は、微妙な歪みを示すのである。

先ず、主人公、内供の言動、性格に就いて見てみよう。前半部の彼は、客観的には、多分に滑稽でもあり愚劣でもあるのだが、読者には、或種の「いぢらしさ」を感じさせる人物でもある。高位にある僧として自尊心、虚栄心に捉われてはいるものの、「年甲斐もなく顔を赤め」たりする「デリケート」な人物として現れている。処が、後半部に至って、内供は、その鼻の外形的变化以上に、性格が一変しているのである。弟子の僧が指摘するように、「法慳貪の罪」に相応する程の意地の悪さと怒りっぱさを備えた人物となり、デリケートさを欠いた言動を示している。そうした傾向は、特に、次のような場面に著しい。

或日、けたたましい犬の吠える声があるので、内供が何気なく外へ出て見ると、中童子は、二尺ばかりの木の片をふりまはして、毛の長い、瘦せた老犬を逐ひまはしてゐる。それも唯、逐ひまはしてゐるのではない。「鼻を打たれまい。それ、鼻を打たれまい」と囁しながら逐ひまはしてゐるのである。内供は、中童子の手からその木の片をひつつたくつてした、かその顔を打つた。

此処では、内供は、既に、曾ての「鼻を気にしてゐると云ふ事を、人に知られる」のを怖れる彼ではない。周囲の人々の側にも内供を怒らせるだけの要因はあるのかも知れないが、それにしても、内供の言動を見る限りでは、彼は、読者の「いぢらしさ」を喚起するような、弱々しい被害者ではない。

処が、如上の、後半部の内供の変貌と其れに伴う読者の感情とは逆に、作者の

内供を見る眼は、寧ろ、前半部に於いて冷やかであり、後半部に於いてより温かなようである。換言すれば、作者と主人公の距離は、前半部に於いてより遠く、後半部に於いてより近いことになる。

例えば、前半部の作者は、「禪智内供の鼻と云へば、池の尾で知らない者はない」と書き出して、内供の全人格の中から鼻だけを抽出し、専ら鼻に関わる内供の愚かしい自尊心の在り方だけを詳述している。そして、その語り口は、論理的、分析的であり、それだけ冷やかである。

例えば、作者は、「内道場供奉」という高位にある禪智の実態を、聖と俗の同居という形で（穏やかにではあるが）暴露しようとしている。長い鼻を短く見せる為、鏡の前で腐心すること自体が、高僧らしく取り澄ました表面の顔とは相容れないのだが、その直後に、作者は、次のように書き加えるのを忘れない。

内供は、かう云ふ時には、鏡を咎へしまひながら、今更のやうにため息をついて不承不承に又元の経机へ、観音經をよみに帰るのである。

此処では、鼻の心配と仏道修業とが並置され、貴とかるべき読經が、宛も卑俗な鼻の心配の不満の結果であるかのような印象すら与えられる。そして、又、こうした内供は、その鼻の短くなった時には、「法華經書写の功を積んだ時のやう」に喜こんでもいる。その外、

内供は、内典外典の中に、自分と同じやうな鼻のある人物を見出して、せめても幾分の心やりにしよとさへ思つた事がある。

という部分からは、内典外典を修めた高僧の、俗人的内面が浮かび上ってくる。そして、こうした内供の、客観的には愚かとしか言ひようのない期待は、作者が其の直後に用意した、逆接の接続詞と其れに続く否定文によって、いとも簡単に、明快に打ち消されている。先の引用に続く部分だが、

けれども、目蓮や、舍利仏の鼻が長かつたとは、どの經文にも書いてない。

同様の、愚かな期待と其の明快な否定という形は、次のような箇所にも現れている。

内供は人を見ずに、唯、鼻を見た。——しかし、鍵鼻はあつても、内供のやうな鼻は一つも見当らない。

以上のように、前半部に於ける作者は、内供の自尊心が生み出す滑稽さ、愚かさ、冷静な態度で描き出している。即ち、作者は、主人公との距離を保ち、揶揄するような形で主人公の人物像を紹介しているのである。

処が、後半部に至って、作者と主人公との距離は俄かに縮まってくる。作者は、時に、内供の、鼻を抑える際の「仏前に香花を供へるやうな恭しい手つき」や、その「禿げ頭」（坊主の禿げ頭とは、念の入った表現だが）を面白がり乍らも、彼を「愛すべき内供」と呼び、その内面へと感情移入して行くのである。そして、遂に、主人公に同化した形で、所謂「傍観者の利己主義」を語る場面へと立ち至る。其処では、作者は、一方的に内供の側に身を寄せ、周囲の人々の言ひ分には殆ど耳を借そうともしない。

例えば、京に上つて鼻を短くする法を教わつてきた弟子の僧などは、元々、奇怪な鼻を持つ内供に対し、極めて同情的である。表面上鼻などは気にかけないという風を装いつら、内心では自分を説き伏せて其の法を試みさせるのを待つという、内供の策略に対しても、弟子の僧は、それを見抜きつつ、その策略に乗っている。そういう策略を弄する内供に、より強く同情しているからである。茹でた鼻を足で踏むという場面でも、弟子の僧は、ややデリケートさに欠けるとはいえ、「時々気の毒さうな顔をして」、「痛うはござらぬかな」という、労りを見せてもいる。

前半部に於いては、作者は、こうした内供周辺の人々を描くにも、その内面を注視し、それだけの筆をさいていた。しかし、後半部に至って、鼻の短くなった内供を見詰める周囲の人々の内面には、殆ど筆を及ぼしていない。詰り、彼等の嘲う原因が、内供の顔がわり以外の、深い何かにあるのかどうかは、客観的には説明されていないのである。そして、専ら嘲われる内供の主観的臆測としての説明されている。「内供は法檀査の罪を受けられるぞ」と陰口をきく外はなかった、あの弟子の僧からすれば、交つたのは、周囲の人々ではなく、内供の方ではないか、ということにもなるであらう。

表面を取り繕いつら、内心では常に長い鼻を苦に病んできた内供にとつて、その鼻の短くなった後に周囲の人々が「一層「つけつけ」と嘲うように感じられたのは、或いは、彼の過剰な期待と過敏な自意識が生み出した妄想ではないか、とさ

え想像されなくもない。例えば、内供から、

用を云ひつかつた下法師たちが、面と向つてゐる時だけは、慎んで聞いてゐても、内供が後さへ向けば、すぐにくすくす笑ひ出したのは、一度や二度の事ではない。

という部分に、内供が感じる程の明確な悪意が実在しているのかどうかは、甚だ疑わしい。

それから、又、例の中童子が鼻持たげの木片で犬の鼻を打とうとした悪戯にしても、無邪気な子供に、内供が感じた程の底意があったのかどうか。鼻が犬の鼻所であることを思えば、それが普通の遊戯としか思われぬ。

以上は、無論、論者の恣意的な想像に過ぎないのだが、「鼻」の問題は、作者の言う「傍観者」の側ばかりではなく、内供の側にもあるのではないか、ということと言えるであらう。

此処で、やゝ唐突だが、論者の想起するのは、『徒然草』第四五段、良覚僧正の説話である。

公世の二位のせうとに、良覚僧正と聞えしは、極めて腹あしき人なりけり。坊の傍に、大きな榎の木ありければ、人、「榎木僧正」とぞ言ひける。この名然るべからずとて、かの木を伐られにけり。その根のありければ、「きりくひの僧正」と言ひけり。いよく腹立ちて、きりくひを掘り捨てたりければ、その跡大きな堀にてありければ、「堀池僧正」とぞ言ひける。

この説話は、良覚僧正と周囲の人々との緊張関係を孕みつつ展開しているが、主人公、良覚の性格を、先ず「極めて腹あしき人」と規定している。後の展開は、多分に此の良覚の性格にも帰因するものであらう。禅智内供は、必ずしも「腹あしき人」ではないが、後半部の彼は、矢張り、怒りっぽく、叱りちらす権勢者でもあった。「鼻」の後半部を、そうした内供の自意識が生み出す一種の喜(悲)劇と見做し、そうした視点から此の二人の僧を比較すれば、彼等が共に、周囲の人々と対立し、世間から疎外され、敗れざるを得なかつた点では共通してゐるよ

うにも思われる。それはさて置き、「鼻」を、内供と周囲の人々との関係、又、内供と作者との関係に於いて掘み直して見ると、其処に一つの歪みのようなものが見えてくる。曾

て三好行雄氏は、その「芋粥」論の中で、「鼻」にも言及され、「傍観者の嘲笑に傷つく被害者としての内供を描く後半と（中略）高德の長者としてあらわれ、長鼻ゆえに傷つく自尊心や偽善をあはかれる前半とは、モチーフのうえて微妙な差がある」と指摘されたが、後半の内供が単純な「被害者」であるかどうかは兎も角、前半と後半の「差」は、恐らく、如上の歪みにも帰因するものであろう。作者と主人公の距離は、後半部に至って縮少し、両者が、やや安易に同化した形で、「傍観者の利己主義」が持ち出されてきた為に、作品「鼻」は微妙に屈曲しているのである。

第三章 「鼻」の周知

周知の如く、「鼻」は、第四次「新思潮」創刊号に掲載され、夏目漱石の激賞を受けることにより、芥川を文壇へ押し出す契機ともなった作品である。漱石の「鼻」評は、芥川に宛てた私信の中で述べられたものである。次に、余りにも有名な其の一節を引用すると、「鼻」という作品は、

……落着があつて巫山戯てみなくつて自然其儘の可笑味がおつとり出てゐる所に上品な趣があります

ということになる。

この漱石の評は、概ね妥当なものであろう。作品全体の印象としては、確かに、「自然其儘の可笑味」が滲み出していると言つてよいし、落着があり、巫山戯ていないことは言うまでもない。唯、しかし、論者には、部分的にだが、二つの点で、この批評からややはみ出す感想がある。一つは、長大な鼻の形態が生み出すグロテスクさであり、一つは、作品後半部に於ける、不自然な可笑味の喪失である。

まず、第一に、鼻の形態はどのように描かれていたのであろうか。それは、

長さが五六寸あつて上唇の上から、顎の下まで下つてゐる。形は元も先も同じやうに太い。云はゞ細長い腸詰のやうな物が、ぶらりと顔のまん中からぶら下つてゐるのである。

こうした鼻は、漱石にはさして怪異なものとも映らなかつたようだが、矢張

り、上品とは言い難く、或る種の奇怪さを伴うものではあるだろう。又、弟子の僧が行う治療法の中で、その奇怪さは増大しているようにも感じられる。

思えば、漱石は、「吾輩は猫である」の中で、同様の、異常な鼻の所有者、金田鼻子を創り出しているが、その形は、次のようなものであった。

鼻丈は無闇に大きい。人の鼻を盗んで来て顔の真中へ据ゑ付けた様に見える。三坪程の小庭へ招魂社の石燈籠を移した時の如く、独りで幅を利かして居るが、何となく落ち着かない。其鼻は所謂健鼻で、ひと度は精一杯高くなつて見たが、是では余りだと中途から謙遜して、先の方へ行くと、初めの勢に似ず垂れかゝつて、下にある唇を覗き込んで居る。かく著るしい鼻だから、此女が物を云ふときは口が物を云ふと云はんより、鼻が口を利いて居るとしか思はれない。

長篇と短篇、現代物と王朝物といった違いがあり、両者を比較することは無理だが、芥川の方が、より即物的であるとは言えよう。恐らく、漱石は、この愛弟子の作品の内に、ゴーゴリの「鼻」などの可笑味と共に、自らの創出した人物の面影を見出していたのであろう。そして、そのグロテスクさよりも、鼻にまつわる自尊心が生み出す喜劇の「可笑味」を、より強く感じたのではないだろうか。

次に、「鼻」後半部に於ける可笑味の喪失に就いてであるが、これは、前章に述べた如く、禅智内供の過敏な自意識が生み出す妄想を「傍観者の利己主義」によつてのみ説明しようとする不自然さの故とも考えられる。恐らく、内供の過敏さは、其の儘作者芥川の過敏さでもあろう。常に他者の眼を気にして揺れ動く芥川の姿は、例えば、岡本かの子の小説「鶴は病みき」の中にも描かれている。避暑地先の旅館で、隣室に訪ねて来た客が、自分の悪口を言っているのではないかと苦慮し、壁に耳を押しあてるといふ、やや病的な晩年の対他意識である。

そして、又、こうした対他意識の過敏さは、漱石の中にも認められるものである。我々は、彼の「吾輩は猫である」や「彼岸過迄」の中に、追跡恐怖症にも似た、過敏な他者意識を見出すことが出来る。又、実生活者としての彼も、例えば、長女筆子の伝える処によれば、或る時、幼い彼女が五錢玉を置いた長火鉢の傍に坐っていると、いきなり父漱石に殴打されたそうで、母鏡子が其の理由を問うと、昔、彼が、ロンドン留学中に街で乞食に銅貨を恵んでやり下宿に帰ると、便所の窓にこれ見よがしに銅貨が一枚置いてあったとかで、見えざる他者の眼に苛

立った記憶から、筆子を殴打したと答えるような一面を備えていた。こうした漱石には、あの中童子の顔を殴打する内供が備えていた對他意識は、共感(?)し得るものであっただろうし、後半部の「鼻」の歪みなど気にはならなかったのかも知れない。

漱石の對他意識に就いては、その詳述を割愛せざるを得ないが、論者は、漱石の卓抜な「鼻」評の中に、同じ資質や趣味を持つ芥川への親近性があったのではないかと想像している。次には、「鼻」に続く「芋粥」の漱石評を手掛かりに、両作品に共通する、初期芥川の対「世間」意識を見ておきたい。

「芋粥」は、芥川が職業作家としての第一歩を踏み出した、記念すべき作品だが、漱石は、芥川宛の私信(注)の中で懇切な批評を行っている。その内容は多岐にわたるが、特に、「芋粥」の作者が「細叙するに適當な所を捕へてゐない点」を指摘し、第一節の部分に就いて、

惜しい事に君はそこを塗り潰してベタ塗りに蒔絵を施しました。(中略)然し、芋粥の命令が下つたあとは非常に出来がよろしい。

と評している。確かに、「芋粥」の第一節、主人公、五位を紹介する部分は、全体のヴァランスを失して細叙されており、漱石の評は的確である。

しかし、この「芋粥」の場合には、謂わば漱石の眼が屈き過ぎた「鼻」評の場合とは異なり漱石の眼の屈かなかった所に、芥川の問題が潜んでいた。即ち、漱石の指摘した、全体のヴァランスを失してまで細叙された部分にこそ、あの「鼻」の後半部と同様に、作者の主人公への同化が見出されるのである。「愛すべき内供」に対応し、「我五位」という呼称が現れ、この「赤鼻」の五位は、哀れな老犬のイメージによって造型されている。

五位は、依然として、周囲の輕蔑の中に犬のやうな生活を、続けて行かなければならなかつた。

こうした伏線の後、次のような、注目すべき場面が描かれている。

或る日、五位が(中略)子供が六七人、路ばたに集つて何にかしてゐるのを見た事がある。(中略)何処からか迷つて来た、老犬の首へ繩をつけて、打

つたり殴いたりしてゐるのであつた。臆病な五位は(中略)年かさらしい子供の肩を叩いて、「もう、堪忍してやりなされ。犬も打たれれば、痛いでう。」と声をかけた。(中略)「いらぬ世話はやかれたうもない。」その子供は、一足下りながら、高慢な唇を反らせて、かう云つた。「何ぢや、この鼻赤めが。」五位は、この語が、自分の顔を打つたやうに、感じた。

此処では、五位は、明らかに、この老犬に自己投影しているが、これは、又、あの「鼻」の中で、中童子に鼻持たげの木で追いまわされた「毛の長い、瘦せた老犬」の場面に重なるものである。こうした場面は、「鼻」や「芋粥」の材源となつた『今昔物語』の中には認められないもので、芥川の創作したものが、こうした点にも注意すれば、内供や五位が、芥川の自己仮託した人物であることが判る。そして、又、芥川が、世間に於ける弱者、敗者を共感を以て描き出そうとしていることも判る。

芥川は、「鼻」の中で、内供をそうした立場に追いつめる「傍観者の利己主義」を問題にしていたが、同様に、「芋粥」の中でも、この五位を取りまく他者、世間を「細叙」しようとしている。即ち、五位の勤める侍所の同僚達は、

……五位に対すると、殆ど、小供らしい、無意味な悪意を、冷然とした表情の後に隠して、何を云ふのでも、手真似だけで、用を足した。

というわけだが、この「殆ど、小供らしい、無意味な悪意」が、「鼻」に於ける「傍観者の利己主義」の延長上にあるものであることは間違いないであらう。

臆病な五位を取りまく世間は、かくの如きものであるが、そうした世間は、次のような形をとって、より明らかにされている。即ち、同僚達に虐められた五位が発する「いけぬのう、お身たちは」という声に打たれた、無位の青年の感慨である。

それ以来、この男の眼にだけは、五位が、全く、別人として、映るやうになつた。營養の不足した、血色の悪い、間の抜けた五位の顔にも、世間の迫害に、べそを掻いた、「人間」が覗いてゐるからである。この無位の侍には、五位の事を考へる度に、世の中のすべてが、急に、本来の下等さを露すやうに思はれた。

芥川は、又、「彼等にいちめられてゐるのは、一人、この赤鼻の五位だけでは
ない。彼等の知らない誰かが、彼の顔と声とを借りて、彼等の無情を責めてゐ
る」とも書いてゐる。こうした一連の記述は、彼が「芋粥」執筆に際し手本とし
た、ゴーゴリの「外套」中からの引き写しであるが、それは、単に、衣装ではな
く、当時の芥川自身の偽らざる対「世間」観でもあったのだらう。彼にとって、
「世間」とは、先ず「傍観者の利己主義」や「無意味な悪意」に充ちたものと感
じられ、「本来の下等さ」を備えたものと認識されていた。

それは、又、後に、例えば、「戯作三昧」のような虚構小説の中でも、主人
公、馬琴を取りまく「下等な世間」として現れ、或いは、又、「蜜柑」のような
隨筆的小品の中でも、主人公を疲弊させる「不可解な、下等な、退屈な人生」と
して現れている。こうした思いは、晩年の「河童」や「玄鶴山房」等に至るま
で、彼の一生を通じて変らなかつたものであり、我々は、それを、彼の文壇的処
女作である「鼻」や「芋粥」の頃から、先ず理屈抜きで強いられている。こうし
た認識がどのようにして形成されたのか、それは、単に、恋愛問題とか家庭環境
とかにとどまらず、彼の根源的な生の在り方に根差した問題であらう。

我々は、「鼻」の内供や「芋粥」の五位など、彼の描き出すやゝ特異な人物達
の劇を見守り乍ら、その背景にある彼の「世間」観のようなものを共有する必要
があるのかも知れない。それが妥当なものであるのかどうか、論者には俄かに判
断し難いが、それを共有しない時、「鼻」や「芋粥」は、所詮作者の血の通わな
い理智的、技巧的作品と見え、それを共有する時、それ等の作品を通して、作者
芥川の、最も優しい心情に触れ得る思いがするのである。

初期の芥川は、こうした「世間」の中で敗者として生きる人々の立場に共感
し、例えば、「芋粥」の五位に、「何となく、一種の慰安を、自分の心に」感じ
ると書いてゐる。同様の感情は、例えば、吾が子から「ロンドン乞食」と命名さ
れる父親を描いた作品「父」などからも窺われる。此処には、理智主義者、芸術
至上主義者、芥川の奥にひそむ、最も柔らかな真情が透視出来るように思われ
る。

以上、論者は、「鼻」の構造に内在する歪みを手掛かりに、初期芥川の意識の
底にある「世間」観のようなものを探つてみた。本論も、又、十分に歪んだとい
う反省もあるのだが、論者は、其処に、無意味な悪意と傍観者の利己主義に傷つ
き乍ら生きる人々への、芥川の共感を見出した。一個の作品としては、やゝアン
ヴァランスな歪みを見せる「鼻」や「芋粥」も、そうした彼の真情の反映された

ものと見れば、一層の興味を喚起するのではないだらうか。

最後に、其の後の芥川に就いて言及するならば、彼は、如上の内供や五位のよ
うな立場に自らを重ねて生きて行こうとはしなかつたように思われる。「芋粥」
は、負け犬「赤鼻の五位」が、敦賀の「身にしてみるやうな」朝風に、「鼻をおさ
えると同時に、銀の提に向つて大きな嘔をし」、其処で物語が閉じられてゐる。
又、「鼻」では、病の癒えた内供が、「長い鼻をあげ方の秋風にぶらつかせなが
ら」、物語が終つてゐる。だが、これ等の作品を発表し、「世間」に登場した花
形作家芥川の人生は、まさに、其処から始まろうとしていたのである。

注1、岩波版『芥川龍之介全集』第一巻所収の本文など、今日の流布本では、

第二回目の方が「——晒ふものはないにちがひない」となつてゐる。本
論には、阿蘭陀書房版『羅生門』所収の本文を引用した。

2、夏目漱石、大正五年二月一九日付、芥川宛書簡。

3、三好行雄『芥川龍之介論』（昭和五年九月、筑摩書房刊）七五頁参照。

4、夏目漱石、大正五年九月二日付、芥川宛書簡。

(一九八〇年八月)